余市町でおこったこんな話

余市町の埋もれた歴史等を紹介し、改めて余市町を再認識するコーナーです。

～その267～『最後の映画館』

ボウリングブームまっただ中の昭和４０年代、「ブラウン管には勝てなかった　銀幕２０年ついに幕」の見出しで、「余市映劇」閉館の記事が掲載されました（昭和４５（１９７０）年８月２５日）。

余市映画劇場（余市映劇）が「竹山興行部」（後に竹山興行株式会社）によって大川町４丁目の一角に開館したのは昭和２５年８月のことでした。余市映劇開館のきっかけとなったのは、それまで映画を上映するために定期的に借りていた昭和座（後の銀映座）を持ち主に返すことになったためとあります。

「こんな話その６３」で紹介しましたが、昭和のはじめ、町内には大川町の余市座、黒川町の昭和座、沢町の恵比寿座と３つの芝居小屋がありました（沢町方面には他にも小林座などの芝居小屋がありました）。

古くからあった芝居小屋では観客は履物（下足）を預けて畳に座って映画を楽しみましたが、戦後に出来た余市映劇は下足を預けず、畳敷きではなく椅子席の洋風な劇場でした。

大川町の余市座は昭和８年の大火で類焼してなくなり、同１２年に桜小路の西側に余市館が新たに完成して興行を始めましたが、同１８年、日本陸軍運輸部船舶部隊、通称暁部隊の宿舎となって映画館としての役割を終えていました。

記事に戻ると、竹山興行部は大正５（１９１６）年に創業、創業者は活動弁士の竹山映洋さんでした。活動弁士とは活動写真弁士の略称で、活弁ともいい、映画が活動写真と呼ばれていた時代、映画自体に音声がなかったので、画面の人物のセリフをしゃべったり、場面を説明する人のことです。

竹山さんは創業翌年の大正６年にキヨさんと結婚、小樽を拠点に「夫婦活弁」で人気を博し、北後志や道南の瀬棚町まで足を延ばして巡業しました。

昭和９年に映洋さんが亡くなった後、キヨさんは本拠地を余市町に移して活躍、「女傑」と呼ばれたそうです。

余市映劇は昭和３２年に複数の映画館をチェーン化するために、銀映座の名称を電気館と改め、古平町の古平座、積丹町の美国座を系列化し「北後志の興行界を一手に握ってきた」とあります（古平座は『古平町史第三巻』に見える昭和２６年８月１５日に開館したオリオン座なのかもしれません）。

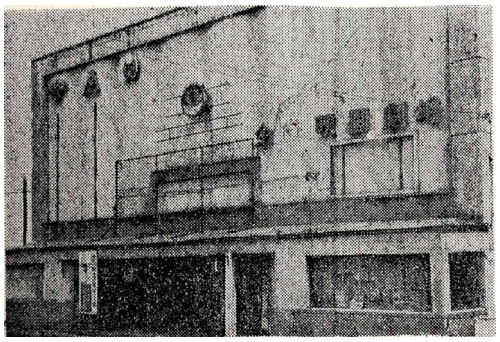
お正月になると、小樽市で新たに上映される映画を余市でも同時に封切りして、数は少なくても、町外へ出られない人、お年寄りなど熱心なファンのために努力を続けてきました。

昭和３０年代中頃まで、国内の映画熱は盛り上がっていました。昭和３３年には国内観客動員数が１１億人を超え、同３５年には年間５４７本の邦画が製作されました。同じ頃にテレビが普及しはじめ、同４０年には白黒テレビの国内普及率が９割を超え、映画館へ足を運ぶ人が少しづつ減っていきます。

そうしてカラーテレビが普及してきた昭和４１年に古平座、翌４２年に美国座が閉館します。

余市映劇も昭和４５年８月３１日にサヨナラ興行を行うこととなり、町民に無料で入館してもらいました。

竹山興行として５０年余の間、北後志の映画興行の一翼を担い、余市映劇は２０年間上映を続けました。



▲ 写真　今月いっぱいで姿を消すことになった余市映劇（昭和４５年８月２５日の新聞記事）

余市町の空間放射線量率　９月１日～９月３０日の本町の空間放射線量率は**「平常レベル」**でした。
（最高値：４２nGy/h、**最低値：**３７nGy/h、**平均値：**３９nGy/h）**※平常時は１０～６０nGy/h程度**

博物館文化財ニュース

申込み・問合せ ☎２２－６１８７
開館時間　９：００～１６：３０

○モイレカレッジ「ニシン漬けを作ろう！」を開催します！

（有）マルコウ福原伸幸商店の福原江太（ふくはらこうた）氏をお迎えし、余市町のニシンの歴史や郷土料理についてお話をお聞きしながら、ニシン漬け作りを学びます。

１回目ではニシン漬けを作り、２回目では完成したニシン漬けをみんなで試食します。

日　時（２回連続講座）：①１１月２８日（土）　９：３０～１１：００
②１２月１９日（土）１０：００～１２：００

場　所：中央公民館　２０５調理室

定　員：２５人　　**参加費**：無料　　**申込期限**：１１月２０日（金）まで